

女性研究者のオンラインカフェ 開催報告

分野を超えた女性研究者同士の交流、若手研究者や、研究職に関心のある学部生に向けたロールモデルの発信を目的に、女性研究者が自由に語り合うオンラインカフェを開催しました。

【日時】令和5年3月8日（水）14:00-15:00

【場所】Zoom

【参加者】14名

【内容】話題提供者2名を迎え、大学院生時代の苦労したこと、研究の進め方、研究と生活の両立などについてお話ししていただく座談会。参加者にも質問や感想などを自由に発言してもらう。

【話題提供者】赤澤祐子（生命医科学域（医学系）・教授）・見市文香（熱帯医学研究所・教授）



【開催内容】

女性研究者の先生方を話題提供者として迎え、参加者と自由に話すオンラインカフェは、今回で3回目を迎えました。誰もが参加しやすいように、今回からは、タイトルを「ダイバーシティ・オンラインカフェ」に変更しました。

今回の話題提供者は、今年度の女性研究者賞を受賞された赤澤先生と、今年長崎大学に着任された見市先生です。最初に、参加者全員で簡単な自己紹介を行いました。その後、赤澤先生と見市先生それぞれから、ご自身の研究の内容と研究以外の好きなことについてお話ししていただきました。また、研究者になった経緯について、見市先生からは、大学院生時代に仲間と日夜行っていた熱心なディスカッションから研究することのおもしろさを知ったこと、赤澤先生からは、臨床医として働く中で研究を通してもっと自身の探究を深めたい気持ちが強くなったことが語られました。参加の先生からも、研究分野を変更した経験、留学経験、大学以外で働いた経験などについてお話ししていただきました。

参加者の学生・院生の皆さんからも熱心な質問がありました。例えば「大学院に進みたいがどの分野が自分に合っているか分からない」という質問について、見市先生は、研究室を異動した経験や様々な分野の研究室の先生と出会った経験などから、今すぐに自分に合う分野を決める必要はなく、様々な分野を経験する中で自分の興味が見えてくるとお話ししてくださいました。赤澤先生も、留学の経験を語られ「点と点があとでつながる」と述べられました。他にも「自分の研究が社会に活かされたと思ったことはあるか?」「自分の研究内容が先行研究も少なく、孤独である」といった質問や悩みについて発言がありました。見市先生は、社会の中で活かされたと感じた例として、自分の研究内容を子ども向けの体験授

業で伝えた経験を挙げられました。赤澤先生は、孤独ということに対して、自分の研究室だけではなくどんどん外とのコネクションを広げていくことの大切さをお話してくださいました。

短い時間ではありましたが、先生と院生同士が自由に発言し合って、互いに刺激を受ける時間となりました。今後も、女性研究者が孤立しないよう、分野を越えた女性研究者のつながりをつくり、互いの研究を豊かにしていく機会を設けていきたいと考えています。

【参加者からの声】

- 2人の先生のお話、そして学生さんの質問、とても参考になり、また同感しながら聞きました。
- 普段聞けないお話などが聞けてよかった。
- 臨床を長いことしていたこともあり、研究というと未だ若手意識が強かったが、いろんな人に意見を聞きながら、また精神的な孤独にならないように立ち振る舞いをしながら進めていけばいいということがわかってよかった。
- 何をしたいのか、ということが一番大切にすべきだと感じました。
- 嬉しいです。アドバイスをもらって、今はやる気満々です。
- 研究分野が途中で変わることに悪いイメージしかなかったが、先生方のお話を聞き、それが逆に利点となる場合もあると知り、一つの研究テーマに固執しなければならないということはないと知れたのはとてもよかった。
- 若手研究者同士のつながりが出来て、とても良い取り組みだったと感じました。